

とした。三日間くらい滞在し、身体検査と軽い調査を受けた。特別臨時列車にて一路東京に向かった。途中の停車駅にて歓待を受けた。私は品川駅にて下車し、家族が迎えに来ていたので一路立川に帰った。ようやく自宅に着いて落ち着いた。

その後会社勤めだったが、今は定年後で余生を送る。至極健康で現在に至っている。

最後に、異国に眠る亡き戦友の冥福を祈り、ペンを擱きます。

私のシベリア抑留

神奈川県 池田秀良

昭和二十年二月、東部第二十二部隊に入隊し、七日後、満州虎林に移動、満州第三一〇七部隊となった。物資不足の折柄、地下足袋をはかされ渡満した。二月ともなれば北満は極寒の地、足の冷たさに往生した。早速と厳しい初年兵教育が始まった。古兵からの制裁

あるものと覚悟していたら、それがなかった。部隊長より嚴重に、私的制裁禁止の命令が出ていたとのことだった。

初年兵教育終了と同時に、虎林陸軍病院に衛生兵教育のため派遣された。ところが間もなく病院は牡丹江に移動した。今思うと、上層部はソ連の侵攻が間近のことを気付いての移動だったかもしれない。原隊は虎林から穆稜に移動布陣していたが、その後、^{えまか}掖河に移ったと後から聞かされた。当時の戦況は連合国側の攻勢で、もはや日本の運命は決せられたかのような状況だった。ずる賢いソ連のこと、この機会を見逃すはずがない。

昭和二十年八月九日未明、中立条約を無視したソ連軍は満州全土に侵入して来た。主力部隊を南方戦線、本土防衛へと送り出した関東軍には既に戦の余力なく、全戦線で後退を余儀なくされていた。ここ牡丹江にもソ連機が飛来、各所に爆撃を加えられた。小銃で反撃を加えたが、どうにもならない。

敵の地上部隊も刻々間近に迫っているとのことだった。

た。したがって、我が病院部隊は急ぎ横道河子に撤退することになった。患者を伴う苦しい避難行が続いた。同行の看護婦さんたちの行く末を思うと身の切られる思いだ。芳芳の果て横道河子に着けば、他の部隊も集結していた。

昭和二十年八月十五日正午、重大な放送があるからとのことで、横道河子小学校にあった、たった一台のラジオを校庭に備え付け、これを取り囲み聴き入った。だが雑音激しく、何のことかさっぱり分からない。やがて部隊長より、日本は連合国に無条件降伏し戦争は終わったと告げられた。

有史以来、他国に負けを知らなかった日本もついに敗れ去ったのだ。だれも彼もなす術なくただ茫然としていた。ソ連軍が進駐して来た。重装備の機械化部隊だ。兵隊の持つ銃は皆、自動小銃である。これに比べて我が方の兵器たるや到底彼らの比ではない。精神力だけを主張し続けた上層部のたわ言にはあきれ返る。

ソ連側の指示で兵器を集め武装解除に応じた。夢にも見たことのないことが現実起きたのである。敗戦

の悲しさと屈辱とはこういうことだった。拉古^{ラコ}という所に集められ千名単位の作業大隊を編成され、貨物列車に乗せられウスリー江を越えシベリアへと拉致された。小さな窓から外を覗くと、丸太を積み上げたソ連独特の民家が点々と見える。沿海州のヴィンキという所で下車させられ、部落から遥か離れたセミヨノフカ第十五収容所に入れられた。この日を期して飢えと寒さと強制労働のしかかって来るのである。

早々と草刈り作業に引っ張り出された。長い柄の先に付いた鎌を横に草をなぎ払って牧草を刈るのである。敗戦の日からろくな物を食べていない。したがって体がだるく、思うように鎌を振ることができない。拳大^{こぶし}の三百グラムの黒パンと少量の燕麦やうずら豆などを利用した薄いスープが一日の食料である。こんな食事では到底重労働に耐えることはできない。シラミが湧いてきた。南京虫も夜になるとぞろぞろ出て来て血を吸われる。冬は想像を絶する寒さになる。栄養失調で死者が続出した。亡くなった戦友の遺骸は雪をかけ、夏を待ち埋葬された。冬は地下何メートルと凍結し穴

を掘ることができないからだ。極寒の中での作業のつらさ。寒いというより体が痛い。

半年も過ぎたところか、所内に風呂場、洗濯場、滅菌所などができたのでシラミや南京虫は駆除できた。これらも皆、我々が作り上げたものだ。だが食料事情は依然として悪く、ひもじい思いを続けた。二年も過ぎるころになると、少量の米や塩漬けの魚類、乾燥トマトなどが支給され、幾らか改善された。しかし十分とは言えなかった。皆痩せこけ、肋骨の張り出した体になっていた。収容所も転々と移動させられ、いろいろな労働をさせられた。伐採、道路工事、建築などで、時には二頭馬車を御し材木運搬もやった。

このころになると、ソ連側にへつらった一部の先鋭分子により民主運動が開始されるようになった。夕食後早く寝たいと思うのに、彼らの指導で、ソ連の発行する日本新聞等を利用して政治教育を強制された。彼らは、我々に対するソ連側の洗脳教育の一端を担っているのだ。反対すればいわれる吊るし上げをくう。また、帰国を遅らされては大変だ。何事も帰るまではと

我慢を重ねた。このように同胞同士の醜い葛藤が繰り返されたのである。

昭和二十三年九月、苦しかった強制抑留生活から解放される日がついにきた。帰国である。貨物列車で運ばれナホトカに着いた。日本船「山澄丸」が入港していた。皆、喜び勇んで乗船した。三年余の悲惨な苦しみを与えられたシベリアの大地を後に、船は祖国に向かって走った。

昭和二十三年九月二十四日、船は舞鶴に入港した。生きて祖国の土を踏むことができた。そして、生死を共にした戦友たちと西へ東へと別れを惜しみ、懐かしい我が家に向かった。あの苦しさ、そして祖国へ第一歩を記したあの感激は生涯忘れられない。

シベリア抑留の思い出

島根県 佐藤 英男

私は大正十四年六月二十日生まれで、村の小学校を